

## 1970年代の都市青年と余暇

独立行政法人国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター

大山 宏

### 1. 「青年」の抱える課題

- ・ 「青年」という言葉が使われ始めた頃から、先行世代と対置するように用いられてきており、その構造の中で青年が社会的弱者となっていくことが指摘される。
  - 1930年代の戸坂潤の文章に触れながら、小川利夫は「いま一度戸坂潤の言葉を借りていえば、こうした状況にある「現代青年は、ほっておけば限りなく弱い社会的無能力者に堕して行く他はない。そこから立ち直るには、闘いが必要だ」学校の内と外との両面において、自主的＝主体的な青年集団・青年運動の自由な発展が、必要不可欠なのである」と論じている。(小川利夫『青年期教育の思想と構造』1978)
  - 上の世代と同じライフコースをたどることが期待できなくなったことが根幹にある。(「親爺の二代目」ではなくなりつつあると戸坂・小川が指摘。1930～1970年代に共通の課題となっている。)
- ・ 「社会的無能力」という弱い状態に置かれている青年が立ち上がるための方法として、集団形成とそれによる運動に言及されている。
  - 「運動の影響力を大きくしようとするれば、その組織を大きく、強固にしなければならない」と指摘されるように、社会的な影響力の拡大が目指された(山口富造「社会の変貌と大衆の学習課題」宇佐川満・福尾武彦編『現代社会教育』1962)。
  - (有職青少年の)「仲間集団は、職場の労働問題を改革する力にはなりえない。せいぜい「仕事」の悩みを吐露し合い、一步ずつ「夢多きフロンティア」を狭ばめ、諦める過程や、気晴らしを求めるレジャー活動に関するしかなくなってくるのではないか」(新井真人「仲間集団と余暇—子どもと青少年の場合—」松原治郎編『余暇社会学』1977)
  - 青年集団には労働問題の改革等、具体的な影響力が求められるのだろうか。また、そのためには組織の強化・拡大が必要になるのだろうか。
- ・ 集団を形成するための手法として、違う立場の者でも共通の課題として議論できるように、議論の内容を抽象化し、個々人の感じている「興味」を「要求」へと練り上げていくことが求められるようになる。
  - 「要求の自覚化とは、みずからがどのような立場におかれているかということを確認し、その問題の解決なしには自分も他人も生活がおびやかされるということの確認である。たんなる好悪、寒暖にかんする感想ではない。」(田辺信一「学習運動の組織」宇佐川満・福尾武彦編『現代社会教育』1962)
  - 生活をおびやかす社会的な要因等と対峙するために、多くの人に共有される「要求」として課題を明示し、それへの対応のための運動によって社会に影響を与えていくという構造がとられることで、必然的に課題を抱える社会を闘争の対象として位置づけるようになっている。

### 2. 都市青年による集団形成

- ・ 都市部の青年による集団形成は、1950年代頃から進められていた。
  - 1953年に横浜・名古屋・京都・大阪・神戸の五つの都市の青年によって五大市青年団体協議会が設立され、これをもとに1969年に都市青年の全国組織である日本都市青年会議が設立される。

→「日本青年団協議会は、日本の唯一の青年団体組織の総本山ではあるけれども、それらの内容を見る時に、農村を主体にするものであり、(中略)日本の中で、五大市の青年団体を無視して都市を語るわけにはいかない。少なくとも五大市の意見なり、五大市の内容を良く理解して、その中で日青協が都市の考えを発表するのであればうなずけるが今日までのあり方ではそれは望めない」(1963年に神戸市青年団体協議会機関紙「青年神戸」に寄せられた文章とされる。日本都市青年会議編『都市青年団体活動読本』日本都市青年会議, 1999)

- ・ 日本都市青年会議でも、「要求」による結束とそれによる影響力の拡大を目指す議論が見られた。
  - 日本都市青年会議の大会についての記録では、分科会のテーマとして第1回大会・第2回大会では青年の感じる暮らしにくさに関わる具体的な項目として、「交通問題」「政治」「住宅問題」「薬品公害」「環境汚染」等が設定されていたが、第3回大会以降「社会参加」という言葉にまとめられる等、多くの人に関わることができるキーワードに集約されていったことが示されている(図1)。

日本都市青年会議 内容についての資料

第1回大会	第2回大会	第3回大会	第4回大会
開催日 1969-5/3~4	1971-7/3~4	1972-9/30~5/1	1977-7/25
場所 大阪市	京都市	東京都	名古屋市
記念論文 「都市における青年の役割」 本村 英一 「青年の生き方」 藤野 高田 好男	「現在の世界情勢下における都市の動向と日本」 東洋大学 藤村 英一 「現代の性とモラル」 木崎 国馬 「未来都市の青年像」 五輪 信太郎	「青年の生き方」 梶 清二 「日本都市青年会議の期許」 空河江善秋	「未来都市創造のための市民参加」 足立 省三 「人間と環境(ハロウ・ムービー)」 真鍋 博
テーマ 分科会 青年と公徳心 青年と交通問題 青年と政治 青年と住宅問題 青年とスポーツ・レクリエーション 青年と万国博	青年の性とモラル 都市青年と社会環境 食生活、薬品公害 環境汚染(大気、水質、騒音) 青年活動とこの施設	創造する青年活動 青年の社会参加 新しい施設と青年者	都市青年運動の展開と期して 創造する青年活動 青年の社会参加 新しい施設と青年者

図1 日本都市青年会議大会分科会の変遷

→第4回名古屋大会では都市青年運動が提唱され、「社会参加」を掲げた分科会でも「政治活動を含めて、若者に、社会制度に関するところの発言の機会と場の提供」をしていくことが求められた。

→日都青第10回東京大会の記録には、「連協体の役割を、①単位サークルでは出来ないものを主催する。②情報交換の場を設定する。③より大きな力として、行政等に働きかける」の三点に集約し、「各単サ(筆者注・各単位サークルのこと)をまとめあげる(組織化)ことにより、市をよくすること(地域)につながる」という記載がある。

→「この都市化傾向が続く社会で、私たち青年はどう対処すればよいのだろうか。地方から就職や進学を求めてやって来る青年を一人でも孤独にさせないよう仲間づくりの輪を広げていくのも決して間違っていない。(中略)だがそれ以上に、私たちは都市化に対する認識を深めなければならない。それは、未来を生きる青年の義務である。都市問題は、住宅、交通、公害、環境等どれをとっても解決には時間を要するし、私たち青年が物理的に解決できるものでもないが、未来都市(健康で豊かな都市)を創造する時に、避けて通るわけにはいかず、青年の英知と実行力を結集せねばなるまい。」(日本都市青年会議会長の小西義行による記述、青年の声編集実行委員会編『私のひとこと=青年活動を充実するために=』青年の声編集実行委員会, 1976)



### 3. 青年個々人は何を感じていたのか

- 横浜市では、1960年代に入った頃から急速にサークルが増加していったことがうかがえる。(図2)
  - 1966年『横浜サークル協議会のしおり』:掲載団体数 18、親睦・交流を目的とする団体数:11。
  - 1972年『青年グループ・サークル紹介』(横浜市)でも、冒頭の「刊行にあたって」で「友だちがほしい、良い友だちをつくろう」と呼びかけられている。
  - 60~70年代頃は地方から都市部に出てくる青年が多く、都市空間の中で孤立していることが課題として認識されるようになっていた。都市青年の孤独は、青年集団設立の大きな要因となっていたといえる。
- 組織化を通し、社会的な影響力を高めていくことは、必ずしも都市青年に受け入れられたわけではなかった。

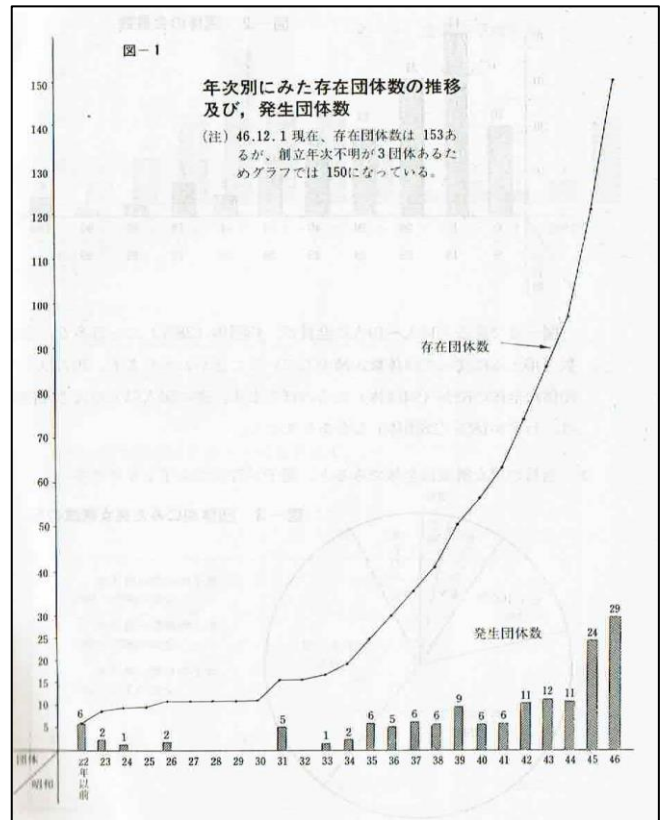


図2 横浜市の青年サークル(設立年次別)

横浜市『青年グループ・サークル紹介』(1972年)より

- 「分科会のテーマどれ一つ取って見ても、どこに本当の青年の問題や悩みがあるのでしょうか」「テーマをもっと私達の身近な題材を選択(するべき)」「形を変えて、地域現場に根ざした研究(例えば、都市の交通、住宅、教育問題や、日本古来の伝統文化。)を発表する方が、地域住民の関心を引き起こす事ができるのではないだろうか」(第8回千葉大会に横浜市から参加した人たちが作成した報告書の記述より)
- 「交通問題」「住宅問題」は第1回大会の分科会テーマだが、それをまとめて案出されたはずのテーマは青年から共感を得られなかったのでは。

表1 横浜市の青年サークルメンバーの手記(一部抜粋) 1972~73年分

1972年5月9日	(他の団体から届いた、バルマーク集めへの協力を求める手紙を貼り付け) こんな手紙が届きました。協力してあげたいと思います。
7月1日	7時40分にいこいの家につきました。だれもいませんでした。(中略)8時20分、Aさんがきました。Bさんに用があると。もっとほかの人も来てくれないかなア。連絡しとけば良かった。
9月9日	今日は雨。皆さんきてないかなと思っていこいの家に電話してみました。どうでしょう、だいぶきていたんですよ。へーて!!感心しちゃった。
10月25日	今日は別に例会日でもないのにやって来ました。実は今度〇〇(このサークル名)で模擬店のおでん屋をやることになったので、そのため文化祭実行委員会のある日にはこうやってよばれもしないのにノコノコと顔を出すのです。(後略)
10月(日付記載なし)	南区で活動してる社活グループより、古切手の募集について協力の依頼がありました。この古切手を現金にかえ各福祉施設等に使用されます。(後略)
10月31日	例によって別にこれと言った事もないのにやってきた。(中略)7時半にBさんが顔を出した。なるほどもうすこし待てばこりやまだまどくるかもしれないゾ。
1973年3月30日	何となく、仕事が終わる、いこいの家へ、気がさそう。別に用はないが若者が集まる。この家は心が休まる。
4月10日	今日はC君が皆でカウベルへ行こうなんて提案したので例会日でもないのにやって来たわけです。あいにくの雨、ホントにやりきれない。(後略)
4月28日	今日この室にはいっておどろきました。新しい仲間がだいぶまじってD君達を中心に楽しく話してました。やるもんですね。(後略)
8月11日	若いみなさんはプライベートタイムの時間だけど、小生デートする相手はいないし、結局この場に遊びに来るのだが、あいにくと今日は私一人。(後略)
9月8日	最近なんといったら良いか以前の様なやる気が出てこないのです。自分でお前は心のために〇〇にくるのか、なんとなくヒマだからさ。家にも面白くない。それじゃ楽しくないだろ。でも結局こんなもんじゃないかな。皆なんとなく集まって、いつのまにか消えてゆく。こんなものかもしれません。(後略)

横浜市の青年サークル連絡帳から抜粋して筆者作成

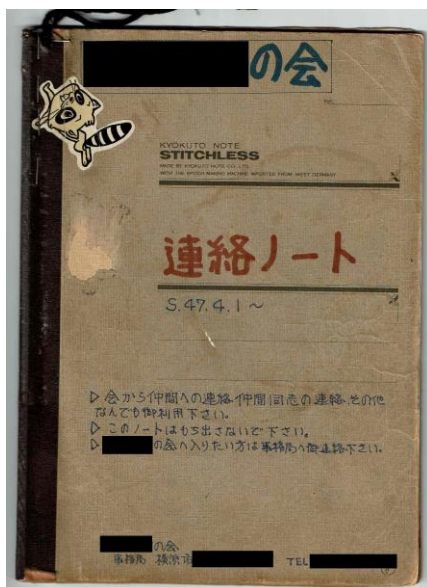


図3 青年サークルの連絡帳

- ・ 実際にサークル等に参加している大多数の青年にとって、組織としての青年集団の拡大や維持よりも、孤独に対応する関係性そのものが重視されていた。
  - 例えば横浜市で活動していたサークルで、メンバー間で共有されていた連絡帳の記述には、「皆なんとなく集まって、いつのまにか消えてゆく。こんなものかもしれません。」という記述もある(図3・表1)。サークルの組織化やそこへの参加は青年自身にとって当為ではなく、「なんとなく」集まっているという感覚であり、あくまでも孤独感等の「興味」への対応が重要とされていたことがうかがえる。
  - ただし、集まっている中で他のメンバーや関係者等の関心に触れる機会も設けられており、

#### 4. 都市青年と余暇

- ・ 1970年代の都市青年の取り組みからは、素朴に感じる「暮らしにくさ」への対応を通して果たす社会参加と、「要求」に応じた闘争によって果たす「社会参加」という、二つの社会参加観を見ることができる(表2)。

表2 2つの社会参加観

	闘争としての社会参加	「暮らしにくさ」による社会参加
社会参加の方針	目的的。課題を見極め、望ましい環境になるように、行政等に対して要求を行っていく。	派生的。必ずしも事前に望ましいあり方を構想してから活動するのではなく、課題があればそれに取り組んでみる。
社会への関わり方	「要求」に応じて闘争。より望ましい環境になるよう、行政等への影響力を確保。	交渉、協力。活動によって社会のあり方に働きかけ続ける。直接的な環境改善。
組織のあり方	必要。組織が強固であるほど影響力が増す。強化・拡大を目指す。	関係性を媒介として「興味」が伝わる等、あればできることが広がる。ただし、厳密には組織よりも関係性そのものが必要。
青年の位置づけ	世代間の対立が前提。社会的に弱い立場。権利を行使する主体。	地域社会の一員。同じ環境を共有する人とは対等。
青年同士の関係性	実践的。疎外の要因を明かにするために、相互に学び合うことが求められる。	情緒的。寂しい、もしくは楽しい等の「興味」によるつながり。

- ・ 青年を組織化し、社会への影響力を高めることで、「社会的無能力」の状態を打破することを目指すならば、「暮らしにくさ」を基盤とした青年のつながりは不十分とみなされかねない。
  - しかし、個別具体的な関係性に先立ち、青年全体に共有される「要求」を見出すことは可能なのか。
  - 集団形成への視点として、多くの人に共有可能な「要求」を見つけ、それを核として集団を形成するという議論もあるが(要求把握論)、それとは異なり楽しさや寂しさの共感によってつながる中で活動が展開していく可能性が示されている。
- ・ 素朴な関心によって活動の幅が広がっていき、結果として社会に関わる。関係性を媒介として他者の「興味」が伝わっていく。
  - 日本都市青年会議第1回大会では、「私たちがなしうることは、町内清掃、花だんづくりなど住みよい町づくり運動を青年会活動の中にとり入れてゆくこと」という議論の記録が残っている。
  - 目指す社会像や解決すべき課題(要求?)を先に定め、それを目指して運動を行うのではなく、青年自身の感覚ではあくまでも余暇的に行っている活動が、結果として公共性を持ち、社会参加につながっていく。